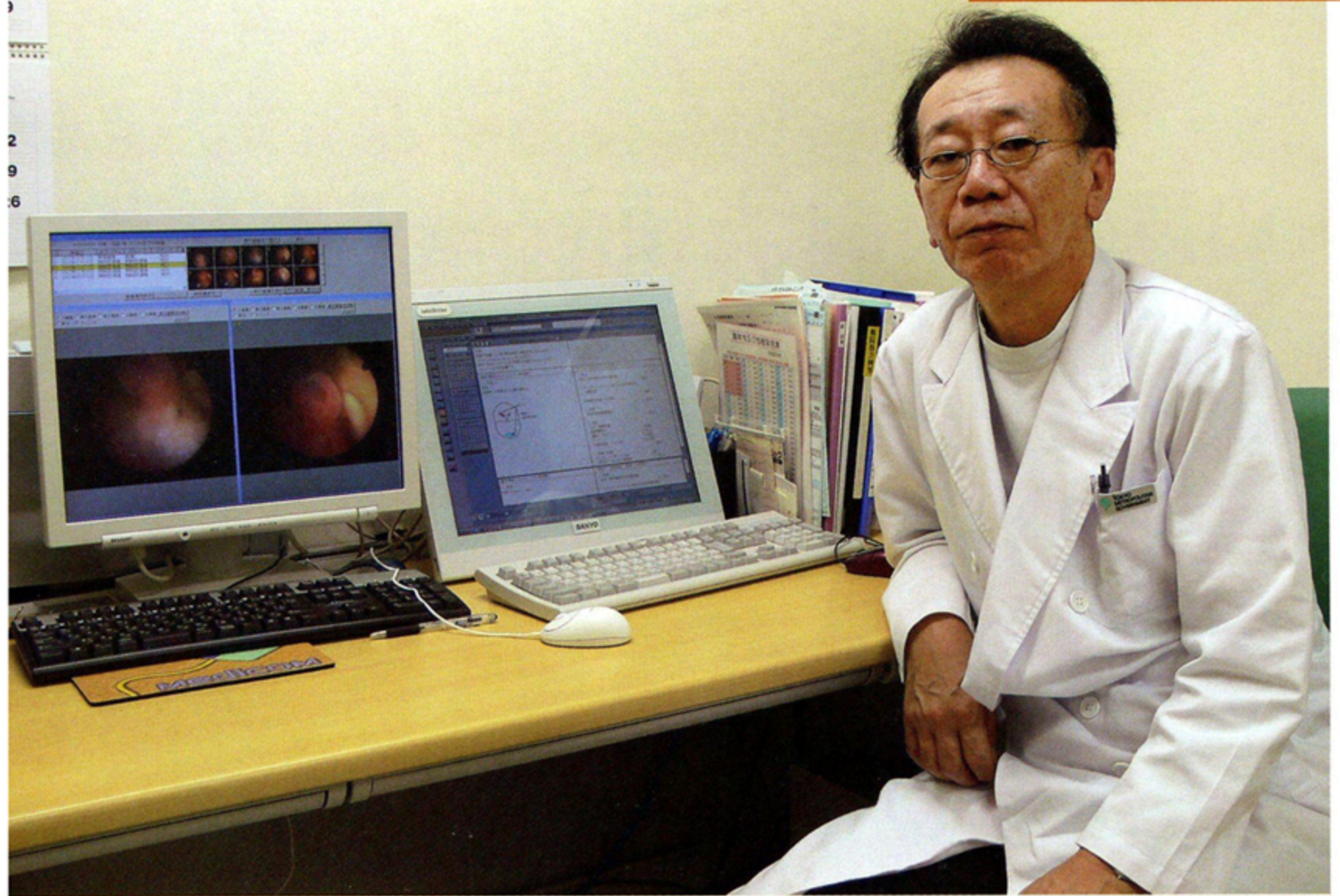


情報の一元管理こそが、医療の質向上の鍵

電子カルテと画像情報システムが連動、医師や職員の作業負担を大幅に軽減



泌尿器科の専門医として、また「町のかかりつけ医」として患者から信頼を集める野垣譲二院長。電子カルテ「Medicom-DP/X (三洋電機)」を導入し、膨大な診療情報の管理・運用を実現している

東京都豊島区に2007年4月に開院したノガキクリニックでは、電子カルテを導入して膨大な診療情報を管理・活用し、診療の効率化と質の向上を実現している。同クリニックの野垣譲二院長に、クリニックでの診療と電子カルテ運用の現況についてインタビューした。

●ノガキクリニック院長 野垣譲二氏に聞く

野垣譲二氏は、母校の日大をはじめ、多くの病院で泌尿器科の医師として臨床に従事。腎移植や泌尿器系の悪性腫瘍など、非常に高度な外科的治療にも携わってきた。その野垣氏が、ノガキクリニックを開業したのは2007年4月のことである。

「大病院でのチーム医療の素晴らしさはわかってはいるつもりです。しかし、同時に、患者さんとコミュニケーションが取れている、きめ細かい医療の場の必要性も考えていました。その思いが次第に強くなり、機が熟したと感じ、クリニックを開いたのです」

開業の地は東京のターミナル駅の1つ、池袋駅から程近い。電車はもちろん自動車での通院にも便利だ。繁華街に隣接しているが、公園や文化施設が多いエリアで、静かな環境でもある。

「患者さんにとって通院が苦痛にならない場所を選びました。また、クリニックの近くには、大きな病院や専門の検査施設もあります。これらの施設と迅速に連携することで、より精度の高い検査や治療が可能なんです」

病院勤務の時代から感じていた紙カルテの限界

ノガキクリニックは07年のオープン時より電子カルテ「Medicom-DP/X (三洋電機)」を導入している。

「地域に対してもきめ細かく診療できるクリニックにしたかったのです」と話す泌尿器科の高名な医師である野垣氏は、「街のかかりつけ医」として、地域医療に貢献しようとしている。

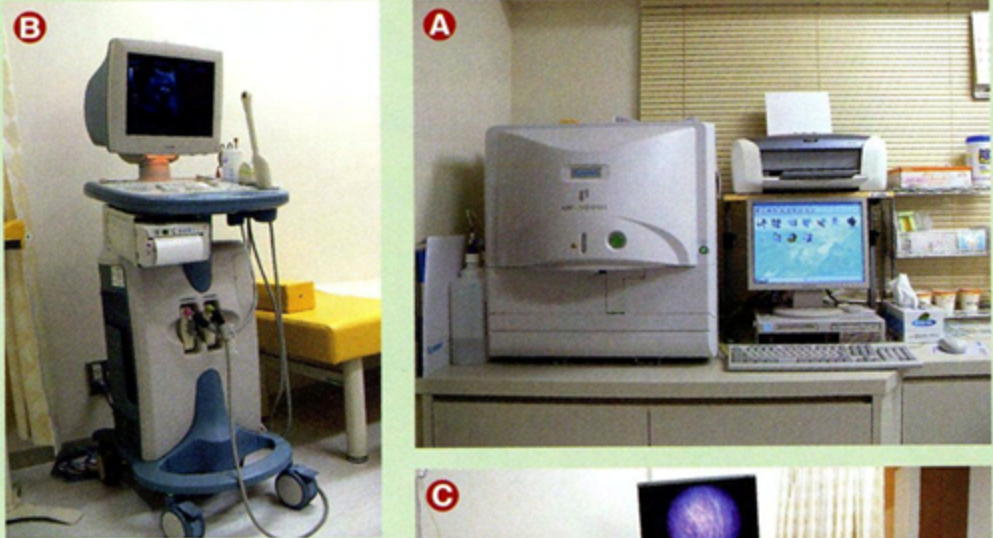
「電子カルテを本格的に使うのは初めて目してしまいました。実際にデモ機を使うとすぐに馴染め、期待通りの性能でした。サポーターやバージョンアップにも柔軟に対応してくれまますので、安心してシステムを利用することができます。電子カルテには、多くの機能を盛り込むよりも、誰でも使える汎用性や、他の機器・システムと容易に接続するなどの拡張性が重要だと感じています」



野垣譲二 (のがき・じょうじ) 氏
1952年三重県出身。79年日大医学。板橋区医師会病院、日大駿河台病院等を経て90年日大板橋病院泌尿器科医長、99年都立豊島病院泌尿器科医長兼部長。07年ノガキクリニックを開業。

ノガキクリニック

〒171-0021 東京都豊島区西池袋3-22-13丸栄ビル2F
Tel:03-3980-6150 URL: http://www.nogaki-cl.com
標榜科目/泌尿器科、内科、外科、在宅医療
診察時間/9時～12時30分、15時30分～19時(水曜・土曜午後・日曜・祝日休診)



ノガキクリニックは、全自動尿中有形成分分析装置(A)、超音波診断装置(B)、CR、内視鏡システム(C)、尿流量計など最新の泌尿器科系設備を持ち、前立腺癌、膀胱腫瘍など尿路性器腫瘍を中心とした悪性腫瘍の診療に取り組んでいる。また、「地域医療に貢献したい」と考える野垣院長は、往診や在宅医療にも積極的対応。都会に暮らす人たちの「町のかかりつけ医」として、クリニックの扉は開かれている。

でしたが、勤務医時代からオーダーリングシステムには慣れていましたので、IT機器への戸惑いは、それほどありませんでしたね」



受付にレセプト端末を設置、診察室のカルテ端末と連携して効率的な業務運用を実施

野垣氏は、勤務医時代から症例などの診療データ整理に、コンピュータを活用していたと言う。

「私はデータの整理が自分でも嫌になるくらい苦手です。それに保存期間が終了したカルテも含め、過去の診療データなどの資料を捨てられない性分です。そこで、またパソコンが普及していない頃からワープロでデータ保存用に使っていました。一度入力してしまえば、個々の患者さんの症例やデータを引き出すことが容易ですし、取り置く紙の資料の量も大幅に減らすことができました。今は電子カルテ「Medicom-DP/X」と画像情報システムを連携させることで、画像を含めた診療情報を一元管理でき、とても便利です」

勤務医時代からの継続診療の患者に加え、クリニック開設後に蓄積されていく新患のカルテが、すべてデジタルデータ化されている。そのことで、開業から約1年を経過しても、ノガキクリニックでは、診察室や事務方のスペースが紙カルテや書類で溢れるおそれは皆無だ。クリニックでは、診察室と処置室にカルテ端末を各1台、受付にレセプト端末1台を設置。この他、往診用のノートPCでも電子カルテを利用している。

「受付と診察室、そして処置室の端末で相互にカルテの共有が可能です。シエーラを画面上に容易に描くことができますし、予約機能や薬の処方に関する機能も便利です」

在宅医療のシーンで、往診用ノートPCで患者さんに検査データを見せることができ、また往診時の記録は帰院してからサーバにデータを移しておけば、次の往診にもすぐに対応できます」

野垣氏は、電子カルテの導入で診療効率が上がっており、より診療に集中できるようになったとも話している。

電子カルテは多機能よりも汎用性や拡張性を優先

「Medicom-DP/X」を選んだ理由について、野垣氏はつぎのように言う。

「数社からデモ機を借りたり、展示場にも足を運びました。電子カルテを選ぶ際のポイントは、画面が見やすいこと、ユーザーが電子カルテのシステムに振り回されることなく、運用する上で良い意味でのファジーな部分があること。それからレセコンや他の医療機器などの連携性を重視しました。特にレセコン分野では、三洋電機は実績があり、当初から注

「私はハートを大切にしたい診療をしたいと考えています。電子カルテを導入したことで、細かい作業や諸々の手間を省くことができ、その分患者さんと向き合う時間が増えました。これからも、電子カルテを上手に利用して、「きめ細かな医療」を患者さんに提供していきます」